

乗ってみませんか!! 「七ツ釜遊覧船」

屋形石漁協水産振興研究会遊覧船部会
神 田 孝 幸

[1] 地域と漁業の概要

私たちの所属する屋形石漁協は、図1に示すとおり県北部東松浦半島の北東部に位置しており、海に向かって左手には“七つの洞窟”からなる「七ツ釜」、右手には“九州サーフィン発祥の地”としても知られる「立神岩」に挟まれ、海岸からはあの“素潜り潜水世界一”の「ジャック・マイヨール」もこよなく愛した“玄界灘を一望できる”絶景の場所にあります。

現在、正組合員84名、准組合員12名の計96名で構成されています。このうち30名が海士漁業を営んでおり、その他は6統ある小型定置網漁業に携わっています。

海士漁業では、海岸線約5kmの共同漁業権内で、アワビ、ウニ、サザエ等の介類及びアラメ、カジメ、ワカメ等の海藻類を採捕・採取しています。

また、6統設置している小型定置網漁業では、アオリイカ、スルメイカ等のイカ類及びアジ、トビウオ、メジナ等の魚介類を漁獲しています。

図2に漁業就業者の年齢構成を、図3に海士漁業就業者の年齢構成を示しました。

これを見ると、漁業就業者数は若干減少傾向にありますが、海士漁業就業者数は増加傾向にあることが伺えます。

特に最近、大学卒業者やUターン者等の20代の若い人が、海士漁業の後継者として育っていることが当漁協の大きな特徴です。

次に、屋形石漁協の漁業生産の現況を説明します。

図4、図5に平成4年から平成13年までの最近10ヶ年の漁業生産量及び漁業生産額を示しました。

組合全体としては、漁業生産量、漁業生産額ともそれほど変化はありませんが、さらなる漁獲の向上を目指し、昭和50年代からアワビ、ウニ類の放流を行っています。また、平成13年度からはヒラメの放流にも取り組んでいます。

さらに平成15年度は、県が事業主体となって、屋形石地先に事業費1億円の藻場造成事業を行っていますので、今後はアワビ、ウニの放流効果も、さらに上がってくるものと期待しています。

以上のようなことから、アワビ、ウニ、ヒラメ等の放流事業は今後も継続して行いたいと思っています。

[2] 課題選定の動機 ～「七ツ釜遊覧船」発足までの経緯～

私たちが数年前から行っている「七ツ釜遊覧船」事業を始めるに至った経緯について説明します。

事業を始めるに当たっては、次のような幾つかの背景がありました。

- ① 最近、大学卒業者やUターン者等の20代の若い海士漁業の後継者が増加してきたこと。
- ② 「七ツ釜」という県下有数の観光資源を生かした「七ツ釜遊覧船」事業が、呼子港を基地として行われていたこと。
- ③ 組合員の中には、たばこ栽培等の農業との兼業者もいて、農業も年々厳しくなってきたこと。

このような背景の中で、「村おこし事業」の一環として、「何とか地元の“七ツ釜観光資源”を生かせないだろうか？」という素朴な疑問が、若い漁業後継者の中から生まれてきました。

そして、組合青年部が中心となって何度か話し合いをしているうちに、「今のままではダメだ。もっと新しいことにチャレンジしよう!!」という意見が多数出てきました。

その時誰かが、「自分たちも遊覧船を使った観光事業をすれば、彼女が見つかるかも分らん!!」と呟きました。この言葉が決め手でした。

何分、若い漁業後継者のグループですので「起つ」のも早く、早速、自分達のアイデアを行動に移し、「新しい事業で、利益と彼女をゲット!!」をスローガンに、平成11年4月、「七ツ釜遊覧船」事業を発足させました。

[3] 活動状況

(1) 「七ツ釜遊覧船」の紹介

それではこれから、現在行っている「七ツ釜遊覧船」を紹介します。

「七ツ釜遊覧船」の営業期間は、4月下旬～10月までの土曜日、日曜日、祝日で、組合の青年部が運営しております。

遊覧船は3隻あり、スタッフは海士漁業の若手後継者が中心です。

波止場は、「玄海国定公園七ツ釜無料駐車場」の直ぐ下にあります。

料金は、大人1,000円、子供500円と超格安に設定しており、遊漁船業届出をした漁船を使って、海上から七ツ釜を観光案内しています。

海況の穏やかな日は、七ツ釜の洞窟の中まで入ることもあります。

所要時間は約20分、美人が乗船すると、それよりも少々長くなることがあります。

また七ツ釜だけでなく、近隣の観光スポットについても、我々“漁師のガイド”付きで案内しています。

この“漁師のガイド”がお客さんに大好評でありまして、他にはない「名ガイド」としてかなり喜ばれています。

折角ですのでガイドの例を一つ紹介します。

皆さん、右手に見えますのが、「七ツ釜」です。

この「七ツ釜」は、その昔、七人の侍ならぬ、七人のオカマが、汗水たらし、一生懸命、穴を掘ったことから「七ツ釜」と呼ばれています。

というような調子で説明しています。

(2) 「七ツ釜遊覧船」の利用状況

続いて、「七ツ釜遊覧船」の利用状況について、平成11年発足当時から平成14年までの大凡の利用者数を図6にまとめてみました。

平成11年の発足当時は、ゴールデンウィークの3日間とお盆の3日間しか営業していませんでしたが、合計すると約900人の利用者がありました。

平成12年は、前年の6日間に加えて、夏休み期間中の日曜日にも営業し、平成13年には、遊覧船を2隻から3隻に増やし、さらに営業期間も4月下旬～10月までの土曜日、日曜日、祝日を追加しました。

図7は、事業開始当初からの利用者数の推移を示したものです。

平成12年の利用者合計は約1,500人、平成13年の利用者合計は約3,000人、そして平成14年の利用者合計は約4,500人と順調に増加し、当初の5倍にもなりました。

遊覧船利用者は、大体県外が60%、県内が40%で、県外は福岡県が多く、なかには関東、関西方面から来ている人もいました。

お客様の感想を聞いてみると、「遊覧船が小さいため、自然を直に体感できる。」と非常に好評です。

遊覧船に乗る前は船が小さいので、お客様の皆さんは大変不安そうにしていますが、帰る時には大変満足して帰られます。

また、体の不自由な方が来られても、スタッフ一同誠心誠意対応していますので、評判が良いようです。

ここで、当初の目標どおり“彼女をゲット”し、めでたくゴールインした仲間も出てきました。

私たち屋形石漁協の「七ツ釜遊覧船」では、“幼児から老人まで”あらゆる年齢層を、「安全、真心」をモットーに、海上から七ツ釜を観光案内しています。

[4] 今後の課題や計画と問題点

(1) 「七ツ釜遊覧船」の問題点

ところで、この「七ツ釜遊覧船」も全て順調という訳ではなく、解決すべき問題点が沢山あります。

1つ目は、特に冬場は海が荒れるので、年間を通して、安定して遊覧船を運航することができないということです。

2つ目は、稼ぎ時の夏場は兼業のたばこ栽培が忙しくなるため、人手不足になることです。そのため現在は、小型定置網漁業者に応援をして貰っています。

3つ目は、これは発足当時からの問題点なのですが、遊覧船が離着岸する波止場の整備が、十分できていないということです。そのため、大潮の干潮時は出港できず、大変困っています。

4つ目は、屋形石地区は携帯電話の電波が入りにくく、スタッフ間の連絡やお客さんとの連絡に、非常に不便を強いられていることです。

そのため、冗談のような話ですが、屋根の上に登って電話やメールを打つ仲間もいるくらいです。

これらの問題点を、早期に解決することができれば、もっとスムーズに事業運営ができると思います。

まだまだ問題点は沢山残っていますが、こうした私たちの取り組みは、全漁連の耳にも入り、「漁業者による観光遊覧船事業」は、全国的にも珍しいので視察に来たい。」と言われ、大変喜んでます。

(2) 今後の展望

最後に、今後の展望について、お話ししたいと思います。

屋形石漁協の水産業は、今のところ現状維持が精一杯で、今のままでは、右肩上がりになるとは考えられません。

兼業の農業も年々厳しい状況になっています。

このようなことから、漁家経営の安定のためには、従来の海士漁業、小型定置網漁業や農業等に頼るだけでなく、現在実施している「七ツ釜遊覧船」事業のような、新しい事業に取り組むことが大切だと認識しています。

そして現在実施している観光事業を、さらに発展させれば、それに併せて小型定置網で漁獲される水産物、屋形石地区の手作り味噌やいちご等の農産物も、観光客相手に販売できる可能性が出てきます。

また、現在全国的な広がりを見せ始めている、「グリーンツーリズム」や「ブルーツーリズム」といった、新しい取り組みもできる可能性があります。

冒頭でも述べたとおり、最近の屋形石漁協では、若い海士漁業後継者が増えていることから、今後は彼らの若いエネルギーを結集し、「水産業、観光業、農業」の3業を上手くリンクさせた、“屋形石地区の特徴を生かした”新しい事業を展開して行きたいと思っています。

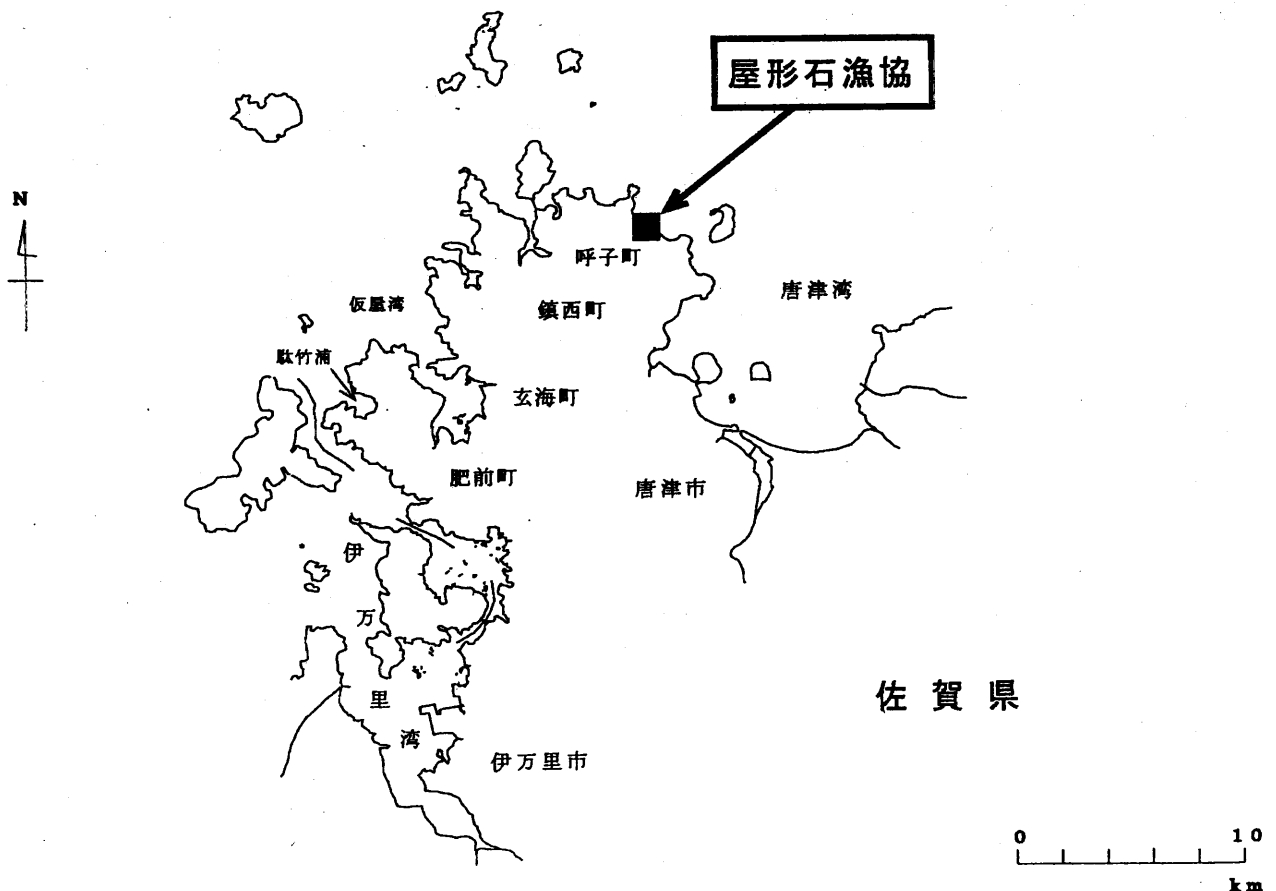


図1 屋形石漁協の位置

図2 漁業就業者の年齢構成

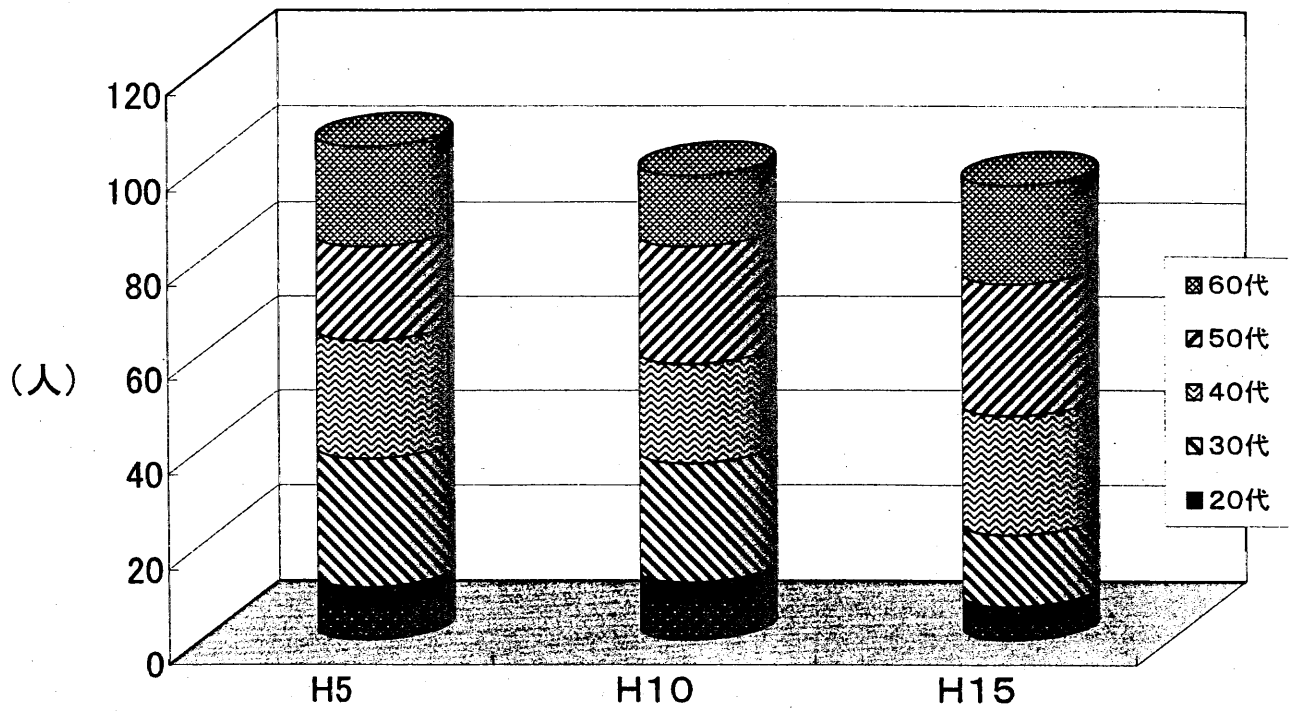


図3 海士漁業就業者の年齢構成

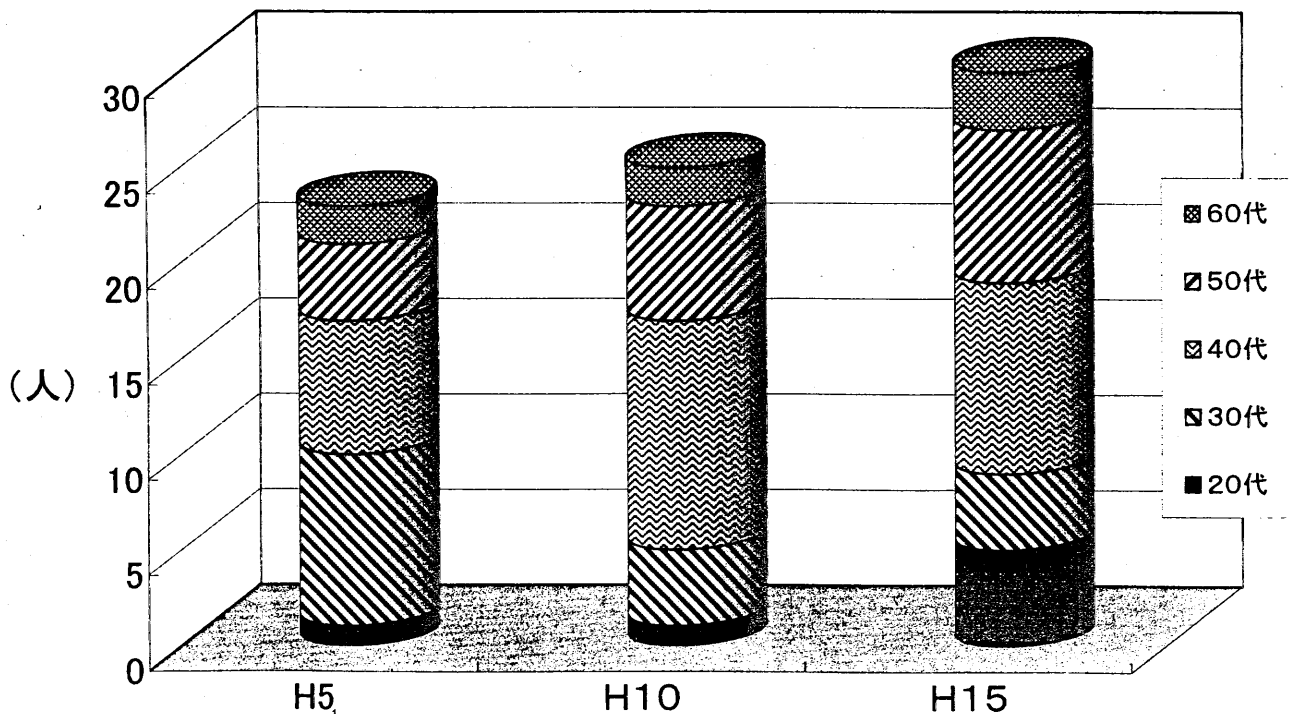


図4 漁業生産量の推移

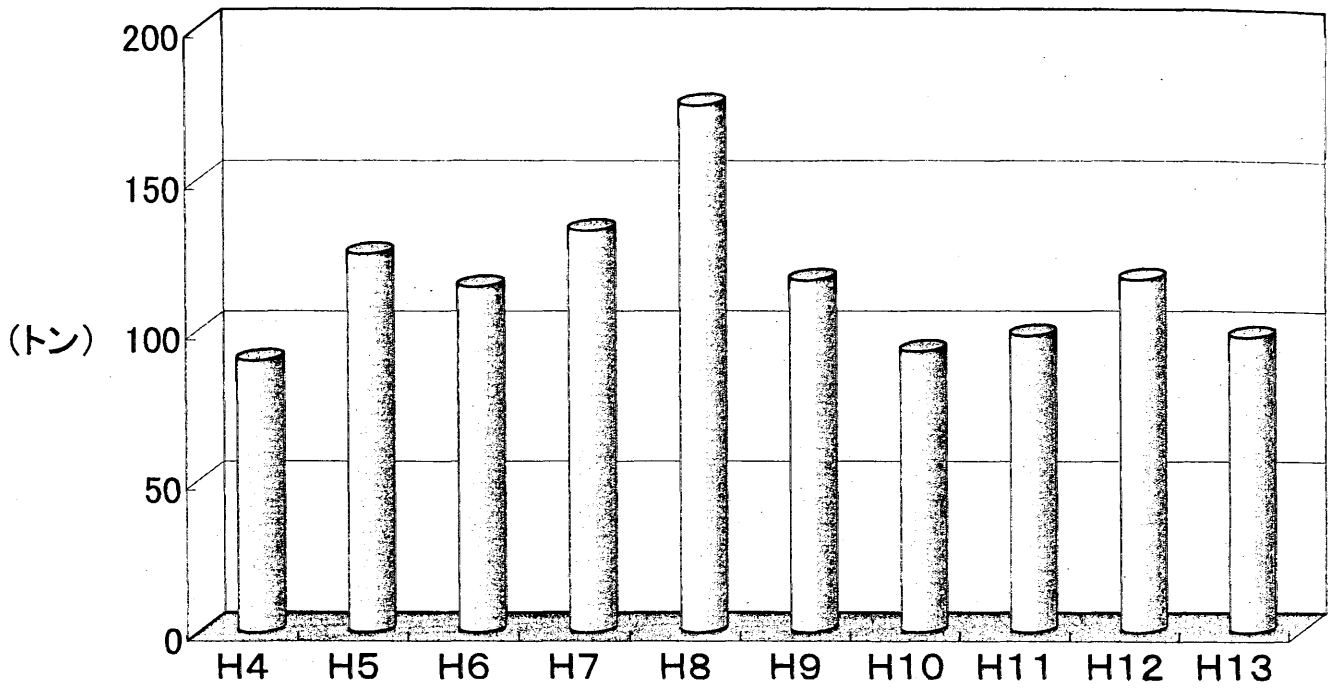
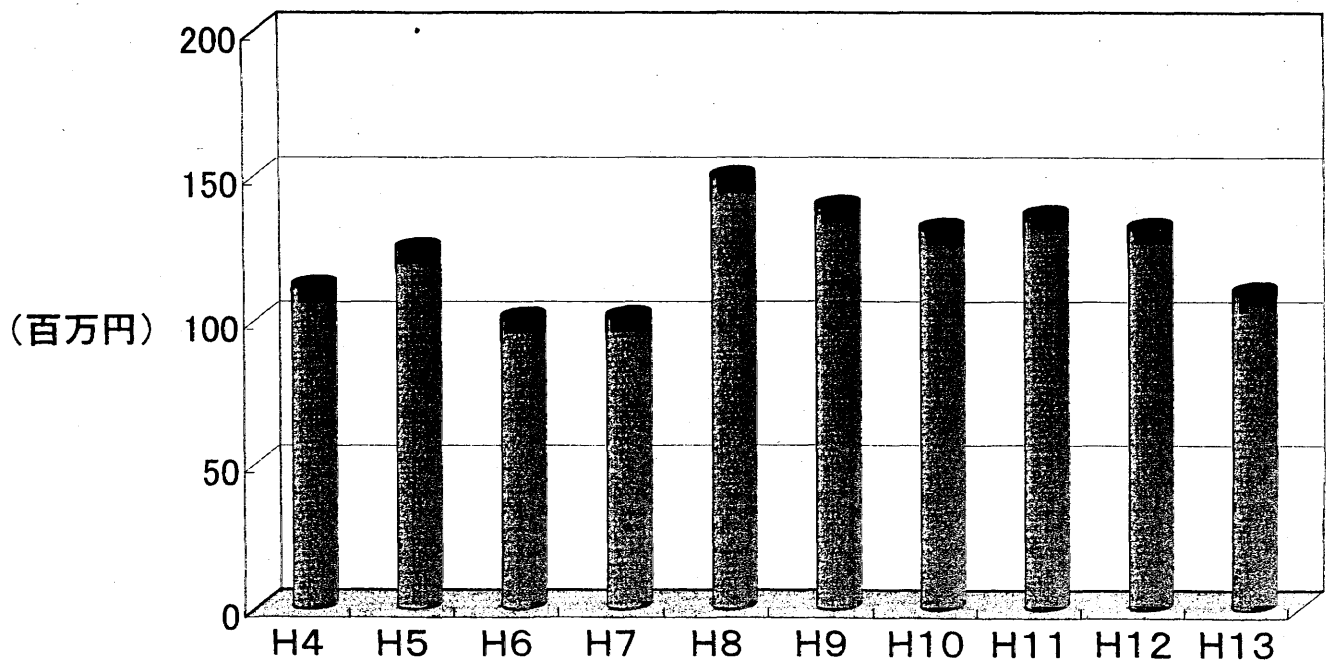


図5 漁業生産額の推移



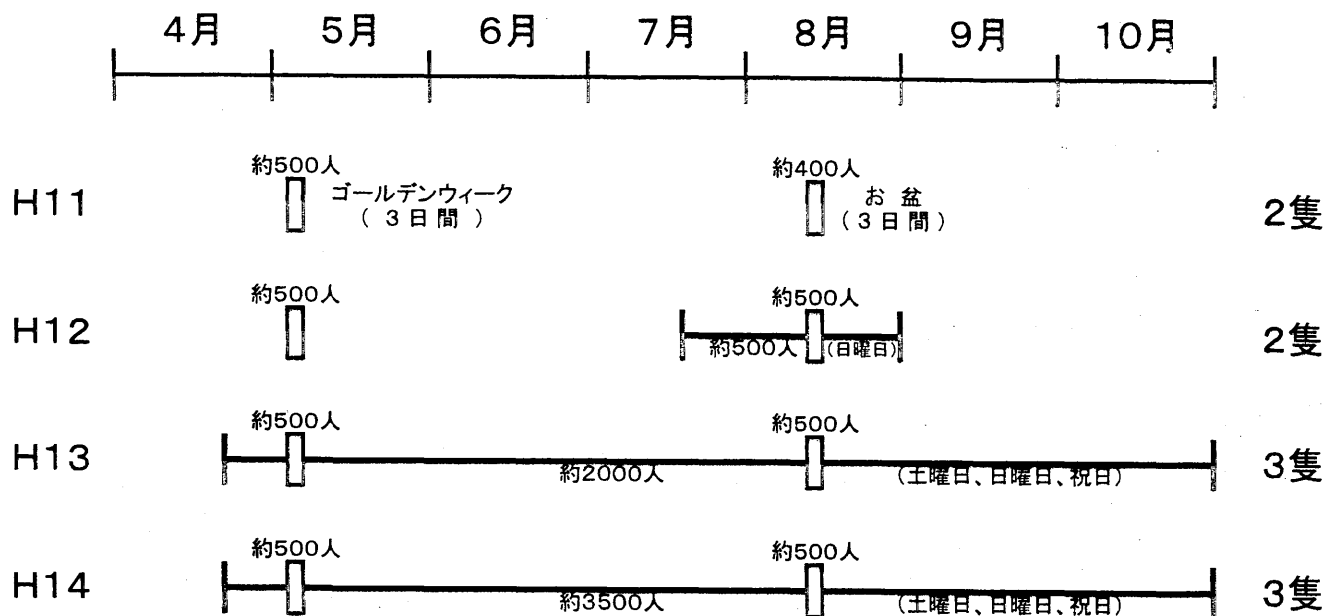


図6 「七ツ釜遊覧船」の利用状況

図7 「七つ釜遊覧船」利用者数の推移

